

# 小川洋子さんと母校訪問



芥川賞作家の小川洋子さん（昭和55年卒）は、最近では映画化された「博士の愛した数式」のベストセラーでも話題になりました。

昨年12月7日、新図書館の落成を記念して、ご著書を学校に寄贈下さり、朝日高生のために座談会に出席下さいました。

以下は朝日高校図書委員会の「図書館報」第62号よりの転載です。

小川 本日は期末試験が近い大事な時期にこのような機会を設けていただきまして皆様どうもありがとうございます。私の「博士の愛した数式」が図書館で貸し出し一位であったということを知りまして嬉しく光栄に思います。私がこの朝日高校を卒業して数えきれないくらい月日がたちましたけれど、朝日高校で過ごしていた時代に出会った本の数々、そのとき自分が感じた思いというのが今もを書き上で、大事な礎となっております。この度図書館が立派に新しくなれるということで、私にとって一番高校時代の思い出が染み



ついたあの図書館がなくなるということは寂しいのですけれども、新しい図書館で若い皆様がどんどん新しい言葉の世界に出会って、自分との会話を深められて、これからの長い人生の礎にしていただければいいなあと、そういう願いを込めて私の本をささやかながら新しい図書館に寄贈させていただくことになりました。

また図書館の片隅で小川洋子の書いた本と出会って、そのときピンとこなくても、5年先、10年先そういえばあのとき高校の図書館で読んだ本の中にこういうことが書いてあったなあ、と1行でもふつと思いついてもらえような出会いをしていただければ非常に嬉しく思います。本日は本当にありがとうございます。

司会 それでは座談会を始めたいと思います。よろしくお願ひします。

今書いてみたい小説のテーマは何ですか。

小川 小説を書き始めてから、現実の世界とどうしても折り合いがつかない、社会の中にすんなりと溶け込めず何かしら違和感を持ち、知らず知らずのうちに世界の端に押しやられてしまっている人間に目を向けて書いていきたいという気持ちがあり、それはずっと変わらず追いつけているテーマです。例えば、「博士の愛した数式」の博士が一番典型的な例で、なにかしら大事なものを失ってしまった人、二度ととりかえしがつかないような欠落感に苦しんでいる人、そういう人間が生きる意味はどこにあるかということを書き続



けていきたいと思っています。

小川 洋子さんの好きな言葉は何ですか。

小川 「この世にあるものはみんな美しい。この世で起ることはみんないいことだ」。例えば、1人の人間でいえば、これは自分の欠点である、これは自分の長所であるという風に自分の価値観でレッテルを貼って、それでコンプレックスを持つたりするということがあるかと思うのですけれども、どんなに自分では醜いと思っている部分でも、この世にあるということはそれだけで意味がある、それだけで美しい、存在するということがもう意味があるという視点で人間や物事を見ていくと、そこから物語が生まれてくるような気がします。既成の価値観にとらわれないで一度すべて受け入れる、という見方がものを書く上で必要になってくるなあと感じています。

いつ頃から、小説を書き始めたのですか。

小川 高校時代から小説を読むのは好きでしたが、好きな本の好きなフレーズを書き写したりして、自分が書いたような錯覚を味わって自己満足したりとか、あるいはちよつとまねごとで短歌を作って新聞に投稿してみたりとか、詩みたいなものを書

いたりしていました。高校時代は、そういう風に言葉を粘土細工のようにして組み立てて、言葉で遊ぶということをしていて、実際に小説を書くようになったのは大学に入ってからです。

高校時代に好きだった本や影響を受けた本は何ですか。

小川 繰り返し読んであこがれを抱いていたのは川端康成です。その当時から、青春小説のような身近なものよりも、老人や死に近づいている人に興味がありました。中学生くらいの時からずっと今も読み続けている本は、「アンネの日記」です。「アンネの日記」は人が死ぬということができる本で、生きていることができる本で、生涯の書として常に自分の傍らに置いてあります。

小川 洋子さんの初恋のお相手は……

小川さんの初恋はどんな感じだったのですか。出来れば詳しくお願ひします。

小川 同じ朝日高校ではなかったのですが、ちよつと隣の高校の野球部に好きな人がいて、その高校に練習を見に行くことができないので、朝日高校の野球部が練習している姿を見ながら、その人を思い浮かべていました。そう言うと、ちよつと気味の悪い女の子ですけれど（笑）。その人の影響ですごく野球が好きになって、それで「博士の愛した数式」に……。朝日高校の野球部のセカンドがどなただったのか全然わかりませんけれど、その人がセカンドだったのですから、セカンドをずっと見ていました。

朝日高校の中で好きな場所はど

こですか。

小川 やはり一番今の自分にとって大事な場所だったという記憶に残っているのは、図書館の長椅子の一番端っこの席です。左手に体育館があるって、バスケット部の練習している声がいっぱい聞こえてきました。そういう風にみんなが元氣よくエネルギーを発散しているのに、自分はただひとりぼっちで本を読んでいるという、そういう孤独感、自分が没頭できる時間が実はすごく好きでした。家に帰るとやっぱり親がうるさいです。教室に行くことやっぱい誰かと仲良くしていきたくないけど、でも図書館だと1人でいても全然おかしくないし、自由にひとりできられる。そういう空間を提供してくれたのが図書館です。それともうひとつ、弓道部に入っていたのですが、弓道場がまったく変わっていったので驚きました。大事に使って来ていたのですね。

大学時代の「クライム」について詳しく教えてください。

小川 田舎から突然東京に出て行って、おしゃれの仕方も分からないし、どこに遊びに行つていいのかわからないような、女子大生なんだけども誰からも相手にされないような4人が集まって「クライム」というのをつくって……。クライムというのは薄暗いって意味の「暗い」と泣くというcryを掛け合わせたのですけれど（笑）。何をするかという、4人で学食のケーキを買ってつまみにしながら、この1ヶ月間に自分がどんな暗くつらい体験をしたかを語り合つたのです。1つルールとして、話を聞くだけで絶対批判しない。ただ黙って聞くだけ、という